



国中だより

一中ホームページ：国立市立国立第一中学校へアクセス

国立第一中学校
学校だより
令和2年 7月号
7月15日(水)発行



2度目のメッセージ

校長 山上 真哉

私は、被爆2世です・・・この学校だよりは以前に私の父のことを書いたものです・・・今年またこのメッセージを伝えることにしました。最初は父のことを書くことをためらい、悩みました。しかし父の体験を伝えることで、私たちが決して忘れてはならない事実を考えるきっかけとしてもらえるのなら、との思いから書かせてもらいました。

8月6日午前8時15分・・・今年も日本の多くの人々が過去の悲劇を思う時間がきます。私も毎年この時間がくると目を閉じて様々な思いを胸にします。

それは75年前(1945年)の第二次世界大戦中に、アメリカ軍が日本の広島に原子爆弾を投下した日です。一瞬にして十万人の命が奪われる出来事が日本の広島市でおきました。私は勿論その時まで生まれていませんでしたが、それでも小学生まで、その意味もわからずに毎年白血病の検査を受けさせられていました。

その朝は澄み渡るような青空でした。父は広島の青年学校の学生で、その日は外で作業をしていました。作業の合間にふと空を見上げると、ぽつんと一機飛行機が広島市上空にさしかかっていた。また作業を続けようとした瞬間、首筋にもすごい痛みを感じ、少しすると熱風が襲いかかってきました。驚いてその方向を振り返ると、見たことのない雲が立ち上がっていたそうです。ただ事ではないと直感した父はすぐに、仲間と共に爆心地に向かいましたが、近づくにつれて現実とは思えない光景が広がってきたそうです。

しかし父は、私にその時のことを話すことはありませんでした。今考えれば、話すことで当時のことを思い出してしまう恐怖と悲しみで口を閉ざしていたのかも知れません。

私が社会人になったある日、市の教育委員会主催の講演会で父が被爆体験の講師を引き受けたのです。その講演会を聞きに行き行って壮絶な事実を父が話すのを初めて聞きました。市内を流れる川に全身やけどをおったおびたらしい群衆が水を求めて飛び込み、死体で川がせき止められていた光景。かろうじて生きているが背中がただれて、腰からたれ下がり、引きずって歩いている人々。跡形もなく破壊された街並みに、ただもがき苦しみがらうごめいている群衆を呆然と立ちすくんで見ているだけだったそうです。

こんな話を普段冷静な父が声を振り絞って涙ながらに熱弁していました。二度とおこしてはならないことを何度も繰り返していました。そんな姿を見て私も胸が熱くなり涙ながらに聞いた事を思い出します。今思えば、それが父からの最初のメッセージでした。

父は15年前に亡くなりました。原爆による放射線が原因の病ではないかと医者にも言われながら、亡くなる前の闘病生活は数年にわたっていました。

ある朝、入院している病院から呼吸が乱れているのですぐにきてほしいと連絡がありました。私は急いで病院に駆けつけましたが、すでに父は息をひきとっていました・・・その日は奇しくも8月6日の朝でした。しかも午前8時になろうとしている時間で、病院の廊下のテレビには、広島の平和記念公園から被爆し亡くなられた多くの犠牲者への黙とうが行われる直前の様子が映し出されていました。告別式は3日後の8月9日に行われました・・・その日は長崎に2回目の原爆が投下された日でした。

今思えば、この日を忘れないでほしいと父は私に2度目のメッセージを残してくれたのかもしれない。

私たちは今、このメッセージを忘れかけていませんか。このような歴史があるからこそ今があることを胸に生きていくことが大切であり、我々ができる次世代へ残さなくてはならない義務ではないでしょうか。

もうすぐ夏休み。そんなことを少しでも考えながら、8月6日と8月9日を迎えてみてください。